

跡 部 遺 跡

2002年3月

大阪府教育委員会

跡 部 遺 跡

2002年3月

大阪府教育委員会

はしがき

八尾市西部域には、亀井遺跡、久宝寺遺跡をはじめ日本を代表する低湿地の遺跡群が分布しています。今回、発掘調査を実施した跡部遺跡もそのひとつであります。跡部遺跡は89年に銅鐸が出土し一躍有名になりました。しかしこれは下水道工事に伴う竪穴の小面積の発掘調査において検出されたものであり、地元教育委員会などの粘り強い調査の積み上げが、この発見につながったと思います。この遺跡では弥生時代前期から中世・近世にいたる時期の遺構が重層的に検出され、この20年にわたり調査データが集積され、次第に遺跡の実態が明らかになりつつあります。

JRの旧竜華操車場の再開発の一環として整備される府道久宝寺太田線予定地内における今回の調査地は、これまで跡部遺跡の中でも比較的の遺構・遺物の出土量がすくなく、濃厚な遺跡の中の希薄な空間であることが、想定されていました。今回の調査においては、そのような環境の形成過程と、それを過去の人々が改変し生産の場として活用するようになる過程を、ある程度把握することができました。けっして華々しいものではありませんが、過去の歴史を復元するためにはかけがえのない資料といえます。

遺跡の価値に優劣はないと申します。まことにそのとおりであります。ひとつひとつの小さい資料を組合せ、大きなそして血の通った歴史を復元し、広く府民の皆様の活用に供したいと考えております。

今後とも文化財の保護と活用に広い理解とご支援を賜りたく存じます。

平成14年3月

大阪府教育委員会
文化財保護課長 小林 栄

例　　言

1. 本書は、大阪府教育委員会が、大阪府土木部の依頼を受け府道久宝寺太田線建設に先だって実施した八尾市跡部北の町所在の跡部遺跡の発掘調査報告書である。
2. 現地調査は、文化財保護課調査第一グループ主査小林義孝を担当者として、平成13年10月から11月にかけて実施した。それに伴う整理作業は、現地作業と併行して調査管理グループが行い平成14年3月に全ての作業を終了した。
3. 本調査の写真測量は、株式会社近畿シビルコンサルタントに委託した。撮影フィルムについては同者において保管している。
4. 調査の実施にあたっては、大阪府土木部、大阪府八尾土木事務所、八尾市教育委員会文化財課、(財)八尾市文化財調査研究会ほかの機関から協力をえた。記して感謝の意を表す。
5. 本書の編集・執筆は主に小林がこれに当たった。

目　　次

第1章　調査の経過	1
1. 調査に至る経過	1
2. 調査の経過	1
第2章　位置と環境	3
第3章　調査の成果	4
1. 調査の方法	4
2. 基本層序	4
3. 遺構と遺物	7
第4章　まとめ	12

第1章 調査の経過

1. 調査に至る経過

J R関西線の久宝寺駅から南へ延びる府道久宝寺太田線の一部、旧竜華操車場の地下を南北に横断するトンネルの南側出口付近の道路改良を実施するにあたり、当該地が跡部遺跡の推定範囲内にあたるために発掘調査を実施した。調査対象範囲は、旧竜華操車場の南端から南方約250mの範囲である。しかし北側部分は、既存道路のトンネルの出入り口部分に重なり、さらに中央部では既設建物の建設時に八尾市教育委員会の発掘調査が実施された部分もあり、道路改良に当たって現実の発掘調査が実施可能であった範囲は限定された。

2000年度に発掘調査が可能な地点の試掘調査を実施し、その成果と周辺地域における八尾市教育委員会等の調査情報とともに、今回の調査地点を選定した。当該地区は道路建設予定地の南端部分に当たり、調査面積は約200m²である（第1・2図、図版1・2）。

2. 調査の経過

現地における発掘調査は、2001年10月～12月の期間で実施した。発掘調査開始以前には鋼矢板打設による土留め工事を、調査終了後には調査区埋め戻し作業と鋼矢板撤去作業を事業者において実施したが、この際には適宜立会を行い、適切に作業が行われるよう指導した。



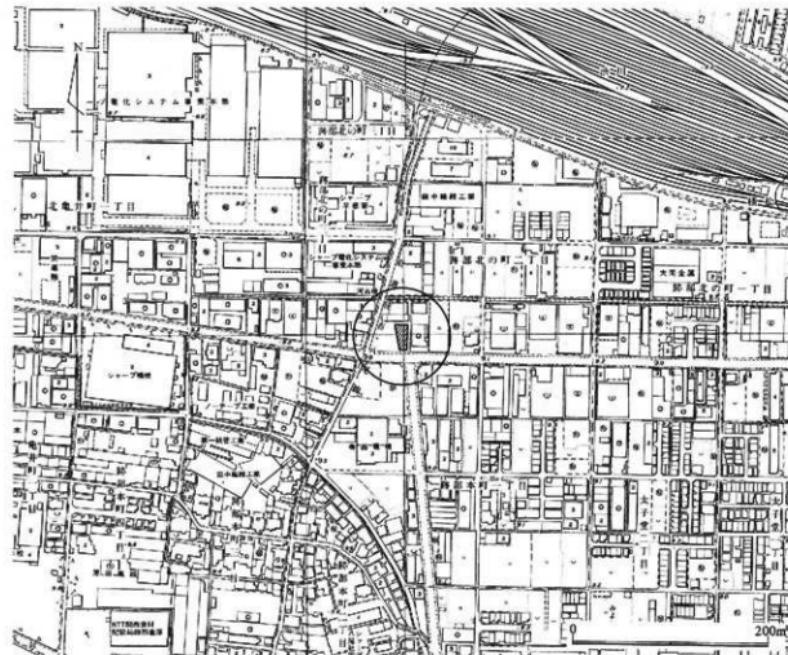
第1図 跡部遺跡の位置

調査データを記録化するために、空中写真測量による遺構平面図、遺構詳細図、調査区断面図等を作成し、遺構写真と合せて全体像の把握につとめた。

また、現地における発掘調査とその終了後の調査データと遺物の整理作業は、調査担当者である小林義孝の指示のもと、鶴山まりがこれに当たった。

現地調査は、10月9日に開始し、第0層・第1層（盛土、近世・近代の耕作土）を重機により掘削する。10月15日から文化財掘削（人力掘削）を開始する。土層を一層づつ掘削し、遺構の有無を確認しながら掘り下げる。10月22日に第8層上面（第2遺構面）を精査し、溝1・3を検出する。10月26日までに第2遺構面の写真撮影と実測作業を終了。11月2日までに第15第16層上面（第3遺構面）を精査。11月16日に第3遺構面の空中写真測量のための垂直写真撮影を行う。11月20日に調査区の中央に主軸に沿って下層の状況の確認のためのトレーニング（以下、中央トレーニングと呼称）を設置し掘削。自然流路3条を検出する。11月21日に中央トレーニング内で検出された遺構と中央トレーニングの土層断面の写真撮影と実測を行う。

遺物と調査データの整理作業は、発掘調査期間中から取りかかり、大阪府文化財調査事務所（文化財保護課分室）において遺物の洗浄、注記ならびに実測と写真撮影を実施した。本報告書の刊行をもって完了する。



第2図 調査区の位置

第2章 位置と環境

跡部遺跡は、八尾市西部に位置し、行政区画では跡部本町、跡部北の町、跡部南の町、太子堂1・2丁目、東太子堂1丁目、春日町、安中3丁目に当たる東西約1.4km、南北0.5~1.0kmの推定範囲をもつ。

跡部遺跡は、旧大和川の一部をなす河川に囲まれた地域に所在し、北側の長瀬川、南側の平野川によって形成された自然堤防と氾濫原に立地している。遺跡の東部では、跡部銅鐸出土地点をはじめ弥生時代前期から古墳時代前期、さらに古代・中世に至る遺構・遺物が検出されており、この地区が跡部遺跡の中心であることは明らかである。

これに対して遺跡の西側部分は、開発行為に先立つ試掘調査や小規模な工事にともなう立会調査を八尾市教育委員会等が精緻に実施しているが、顯著な遺構・遺物が検出された地点は少ない。とりわけ当該調査区付近は弥生時代から古墳時代前期には、周囲より標高が低く、浅い谷地形があり込み、湿地帯を呈していたと推定されている。今回の調査は銅矢板により土留めを行い発掘調査を実施したことから、現地表面下5m付近にまで土層の観察が及び、この一帯の地形の形成過程や環境の復元に寄与する情報を得ることができた。

第1表は、跡部遺跡における顕著な遺構・遺物が確認された主要な調査地点の概要である。

番号	地区名	所 在 地	主 な 成 稲	文 献
1	ATB2-1	跡部本町1丁目5	古墳時代の包含層	「八尾市文化財調査研究会報告26」1989
2	ATB3-2	跡部本町1丁目46	縄文時代の井戸・土坑・溝・小穴群	「八尾市文化財調査研究会報告5」1984
3	ATB7-3	安中3丁目26, 19-5	長瀬川左岸堤防	「八尾市文化財調査研究会報告16」1988
4	ATB8-4	跡部本町1丁目41-1, 4-2	古墳時代前期の土坑・溝	「八尾市文化財調査研究会報告25」1999
5	ATB9-5	春日町1丁目45-1	弥生時代後期の銅鐸鋳造場、古墳時代前~平安時代後期の遺構面	「八尾市文化財調査研究会報告31」1993
6	AT91-6	春日町1丁目	古墳時代前期の遺構面、弥生時代前期・古墳時代前~奈良時代の包含層	「八尾市文化財調査研究会報告34」1999
7	AT92-7	春日町1丁目47, 48	弥生時代後期の河川、古墳時代前~奈良時代の包含層	「八尾市文化財調査研究会報告36」1995
8	AT92-8	跡部本町4丁目4-20	奈良時代の井戸、古墳時代の土坑・溝・小穴	「八尾市文化財調査研究会報告39」1993
9	AT92-9	春日町1丁目	弥生時代後期~古墳時代前~奈良時代の包含層、古墳時代後期~奈良時代の包含層	「八尾市文化財調査研究会報告39」1993
10	AT92-10	春日町3丁目	弥生時代中期の井戸、弥生時代後期の土坑(鉛鉢出土)	「財團法人八尾市文化財調査研究会報告58」1997
11	AT92-11	太子堂1丁目106	弥生時代前中期の河川、弥生時代中期の溝・小穴、古墳時代前~平安時代の遺跡	「財團法人八尾市文化財調査研究会報告58」1997
12	AT93-12	春日町1丁目35-1・2	弥生時代後期~古墳時代前期にかけての5段の遺構面	「平成5年度 (財)八尾市文化財調査研究会事業報告」1994
13	AT93-13	太子堂1丁目16	弥生時代中期後半の大規模な溝	「平成5年度 (財)八尾市文化財調査研究会事業報告」1994
14	AT94-10	跡部本町1丁目	遺構・遺物検出	「財團法人八尾市文化財調査研究会報告42」1994
15	AT94-15	春日町1丁目2~44	古墳時代の自作河川、古墳時代前~奈良時代の土坑	「財團法人八尾市文化財調査研究会報告58」1997
16	AT94-16	跡部本町1丁目	弥生時代中期の河川、古墳時代後期の河川、平安時代の河川	「財團法人八尾市文化財調査研究会報告58」1997
17	AT94-17	太子堂1丁目	弥生時代前中期の土坑・小穴	「財團法人八尾市文化財調査研究会報告58」1997
18	AT94-18	跡部本町3丁目	古墳時代後期~奈良時代初期の河川	「財團法人八尾市文化財調査研究会報告42」1994
19	AT95-19	春日町3丁目	弥生時代後期~古墳時代初期の河川、古墳時代中期~奈良時代の包含層、平安時代の溝	「財團法人八尾市文化財調査研究会報告53」1998
20	AT95-20	春日町4丁目	弥生時代後期~中期の包含層、弥生時代中期後半~古墳時代初期の土坑・溝	「財團法人八尾市文化財調査研究会報告53」1998
21	AT95-21	太子堂1・2丁目	奈良時代の井戸	「財團法人八尾市文化財調査研究会報告53」1998
22	AT96-22	太子堂1丁目	古墳時代後期の包含層、近代の井戸	「財團法人八尾市文化財調査研究会報告60」1998
23	AT96-23	春日町4丁目4	弥生時代後期~古墳時代初期の遺構面、銅鏡出土	「平成5年度 (財)八尾市文化財調査研究会事業報告」1997
24	AT96-24	太子堂1・2丁目	古墳時代前中期の河川	「財團法人八尾市文化財調査研究会報告60」1998
25	AT97-25	春日町2・3丁目	古墳時代初期~古墳時代後期~奈良時代・平安時代・中世以降の道筋・遺物	「財團法人八尾市文化財調査研究会報告82」1999
26	AT97-26	太子堂1・2丁目	奈良時代以後の河川、平安時代の包含層	「財團法人八尾市文化財調査研究会報告62」1998
27	AT97-27	春日町3・4丁目	弥生時代前中期の土坑・溝、古墳時代後期の溝	「財團法人八尾市文化財調査研究会報告62」1998
28	AT97-28	跡部本町4丁目	時期不明の河川	「財團法人八尾市文化財調査研究会報告65」2000
29	AT98-29	跡部本町1丁目4-16~35	古墳時代初期の包含層	「財團法人八尾市文化財調査研究会報告65」2000
30	AT98-30	跡部本町4丁目	時期不明の河川	「財團法人八尾市文化財調査研究会報告65」2000

表1 跡部遺跡における主な調査成果

第3章 調査の成果

1. 調査の方法

発掘調査に先立って土留めのために鋼矢板を打設し、第2層以下人力により掘削し、遺構・遺物の検出に努めた。遺物の取上げや遺構の検出地点の表示のために調査区全体に5m四方のメッシュを設定した。また第16層以下の遺構の有無と層位の確認のために調査区の中央に長さ14m前後の中央トレンチを設置した（第3図・図版2）。

2. 基本層序

当該調査区で確認した土層は次の通りである。調査区の現地表面の標高はT.P.+9.5m前後である（第4・5図、図版3・6）。

（1）現代の土層

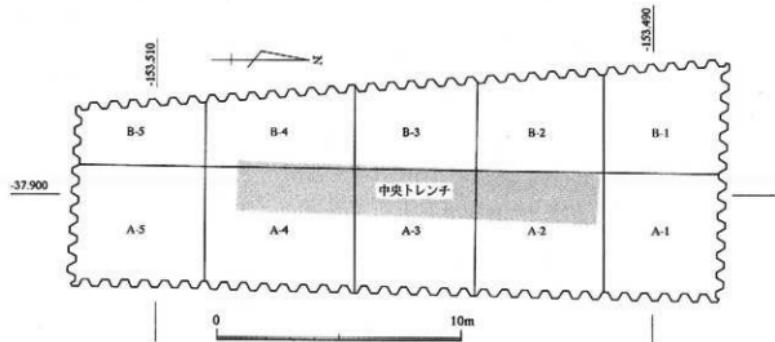
第0層 表土および盛土。当該地区一帯は近年まで耕作地として活用されてきたが、近年工場用地等として開発された際に施されたものである。

（2）中世・近世の土層

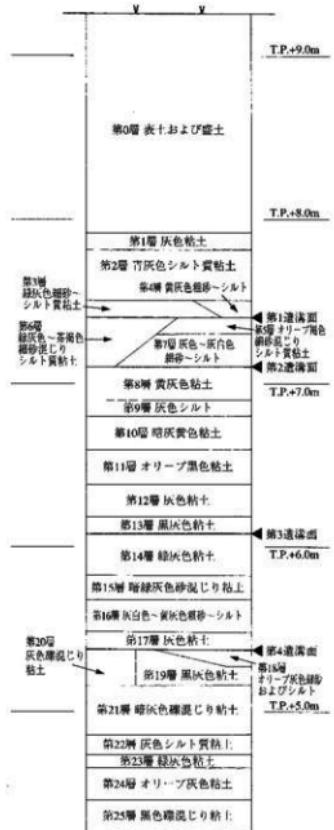
第1層 灰色粘土。厚さ約20cm。近世の土器片等が出土。近年まで使用されていた耕作土である。

第2層 青灰色シルト質粘土。マンガンを少量含む。厚さ約20cm。上面の標高はT.P.+7.8m前後である。中世～近世の遺物が出土。

第3層 緑灰色細砂～シルト質粘土。マンガンを含み、黄褐色に変色する。厚さ約15cm。中世～近世の遺物が出土。



第3図 地区割と中央トレンチの位置



第4図 土層断面様式図

(3) 奈良・平安時代の土層

第8層 黄灰色粘土。厚さ20~30cm。上部はマンガンの沈着により変色する。下部に部分的にシルトの薄い堆積がみられた。上面は溝1・2が検出された第2遺構面に当たる。溝2は平安時代に比定され、本層はそれ以前に形成された土層と考えられる。上面の標高はT.P.+7.0m前後を測る。第2遺構面では人間や鳥の足跡が検出され安定した状況が想定されるが、以下の土層は基本的に自然堆積層で、出土した遺物も原位置を保つものはない。

第1~3層は耕作土層である。出土遺物の所属時期から判断して、当該地は中世には開発され、近世を通じて耕作地として活用されていたと考えられる。耕作地が廃棄され工場用地等として使用されるのは近年のことである。

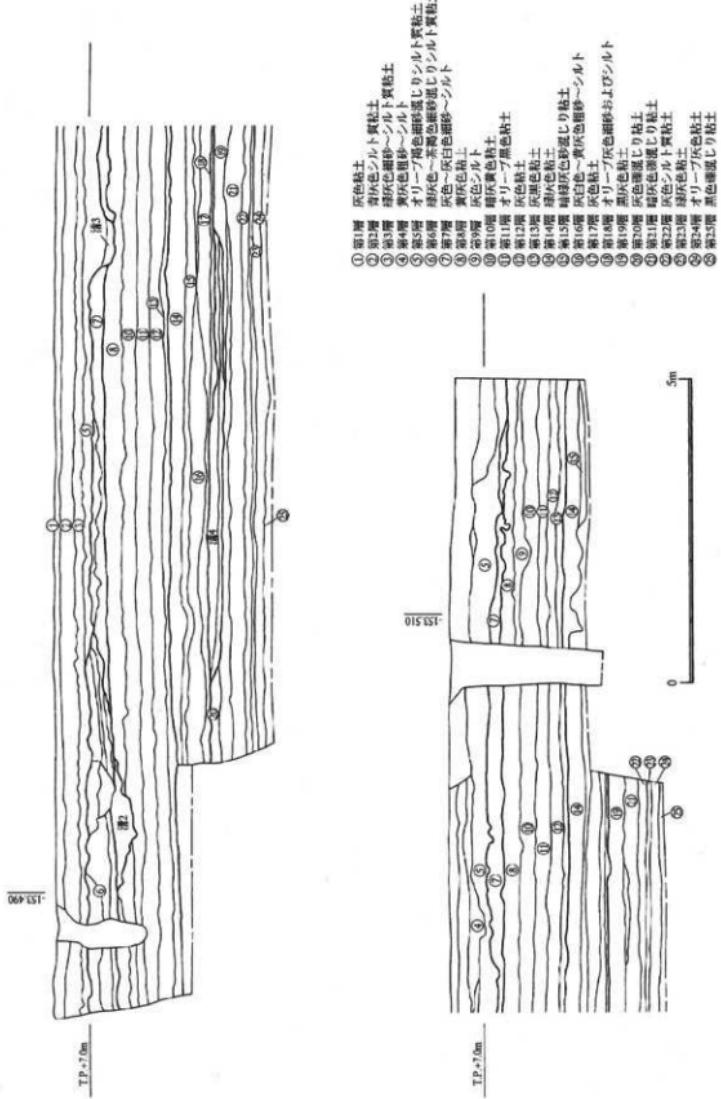
第4層 黄灰色粗砂シルト。A-2・B-4区以南で確認した。厚さ10~20cm。河川の氾濫に起因する堆積層と考えられる。遺物の出土はみられない。

第5層 オリーブ褐色細砂混じりシルト質粘土。マンガンを多量に含み固く締まっている。A-2・B-2区以南で確認した。厚さ10~20cm。上面の標高はT.P.+7.5m前後を測る。

第6層 緑灰色~茶褐色細砂混じりシルト質粘土。第5層に対応し、A-2・B-2区以北で確認した。第5層上面で形成された自然流路の埋土に相当する。堆積状況の違いによってさらに5層に細分される。

第7層 灰色~灰白色細砂シルト。厚さ10~30cm。最下部に厚さ5cm前後の灰色シルトの帶状の層が観察された。河川の氾濫に起因する堆積層と考えられる。上部は第5・第6層からの擾拌により耕作土化する。標高T.P.+7.3m前後を測る。第7層上面が第1遺構面である。

第1遺構面では、中世に帰属する溝が検出されており、当時の生活の痕跡等の一部が存在した。



第5図 調査区東壁土層断面図

(4) 古墳時代以前の自然堆積層

- 第9層 灰色シルト。A-4・B-4区以南で確認した。部分的に植物遺体がレンズ状に堆積する。
厚さ10~30cm。
- 第10層 暗灰黄色粘土。厚さ10~30cm。カルシウムの斑点が観察される。
- 第11層 オリーブ黒色粘土。厚さ20~30cm。ヨシ等の植物遺体が層を成して堆積。植物遺体の層は厚さに変化がみられ、また部分的に途切れるが、基本的に調査区全面に広がる。桃核が出土。
- 第12層 灰色粘土。厚さ20~30cm。ヨシ等の植物遺体を含む。下部にカルシウムの斑点が観察される。弥生時代後期~庄内式に属する甕の体部片が出土。
- 第13層 灰黑色粘土。厚さ約10cm。弥生時代中期~布留式に属する甕の体部片、桃核が出土。
上面の標高はT.P.+6.3m前後を測る。
- 第14層 緑灰色粘土。ヨシ等の植物遺体を含み、カルシウムの斑点が観察される。厚さ20~30cm。上部は第13層との境界が曖昧で、不安定な堆積状態である。
- 第15層 暗緑灰色砂混じり粘土。植物遺体を含む。厚さ10cm。
- 第16層 灰白色~黃灰色粗砂~シルト。厚さ5~30cm。調査区中央部で薄くなる。河川の氾濫に起因する堆積層と考えられる。上面が第3遺構面である。上面の標高はT.P.+5.7m前後を測る。
- 第17層 灰色粘土。厚さ10~20cm。部分的に植物遺体が層を成して堆積。弥生時代中期に属する甕の体部片が出土。
- 第18層 オリーブ灰色細砂と同色のシルトの互層をなす。厚さ5~10cm。A-3・B-3区以南で確認した。河川の氾濫に起因する堆積層と考えられる。
- 第19層 黒灰色粘土。調査区南部にみられる。厚さ約30cm。上部に植物遺体が層をなして堆積している。上面は溝4・5・6が検出された第4遺構面に相当する。
- 第20層 灰色礫混じり粘土。調査区北部にみられる。厚さ約20cm。上面は溝4・5・6が検出された第4遺構面に相当する。
- 第21層 暗灰色礫混じり粘土。厚さ約30cm。礫の含有量により上下2層に分けることが可能である。下部から土器細片が出土したが、所属時期を特定できない。
- 第22層 灰色シルト質粘土。厚さ約10cm。
- 第23層 緑灰色粘土。厚さ約5~10cm。
- 第24層 オリーブ灰色粘土。厚さ約10~20cm。
- 第25層 黒色礫混じり粘土。厚さ約10cm以上。上面の標高はT.P.+4.5m前後を測る。

3. 遺構と遺物

(1) 中世・近世以降の遺構

第1遺構面である第7層上面では溝3が検出され、さらに井戸が存在する（第6図）。

溝3 第7層上面のA-3・B-3区で検出した東西方向の溝である。幅約70cm、深さ約25cmを測る浅いU字形を呈する断面をもつ。埋土は褐色粘土であり、マンガンの沈着が多い。遺物の出土がなく時期を特定できないが、前後の土層との関係から広く中世に帰属するものであろう。

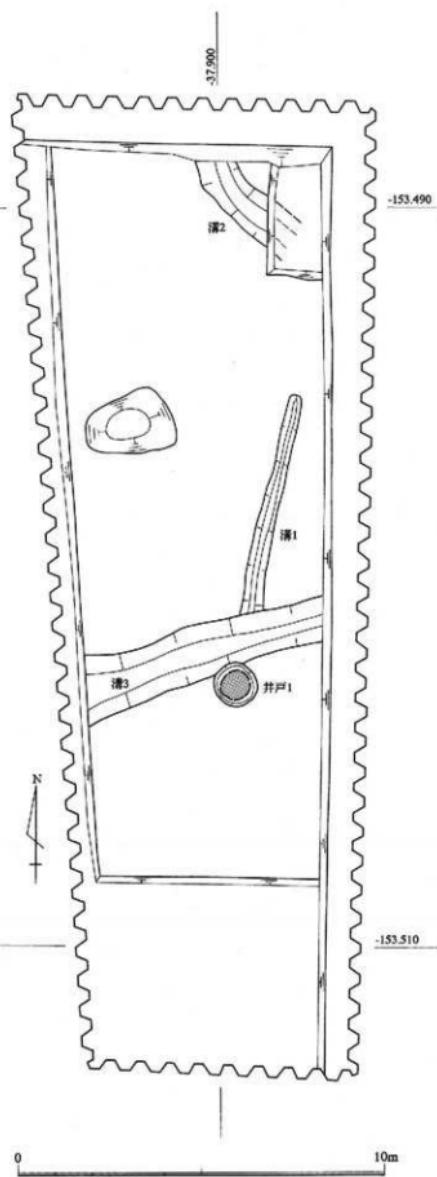
井戸1 A-1区で検出。最下部からドラム缶の断片が出土したことから、工場造成時に埋め戻された近代の農業用水の確保のために作られた井戸と推定される。直径約1.2mの円形の掘方の中央に井戸枠を据えたものである。井戸枠は最下部で直径約90cmの桶枠の最下部数cmを検出したのみである（図版3）。

(2) 奈良・平安時代の遺構

第2遺構面にあたる第8層上面で2条の溝を検出した（第6図）。第2遺構面では、人間、鳥などの足跡を多数検出した。人間の足跡は歩行の状態を示すものもあり、この面で何らかの活動が行われていた痕跡である。第8層以下の土層の上面においては、人間等の足跡の検出も著しく少なく、当該地点が人間の活動領域に含まれたのは、この時期以降と考えられる。

溝1 A-2・A-3区で検出した南北方向に走る溝である。南側は第7層上面から切り込んだ溝3により切られている。幅約40cm、深さ5~7cmを測る。埋土は、第7層に類似する灰白色細砂シルトである。溝の底部では多数の足跡を検出した。

溝2 調査区の北端部（A-1区）、東北コーナー付近で弧を描いた状況で検出された。幅約2.1m、深



第6図 第2遺構面平面図

さ約40cmを測る。断面は不定形な平皿状を呈す。埋土は、灰色～黄灰色の細砂～シルト及び灰色粘土が混ざったものである。奈良時代後期から平安時代初期の須恵器・土師器片や獸骨の断片が出土した(第7図、図版4)。

(3) 弥生時代の遺構

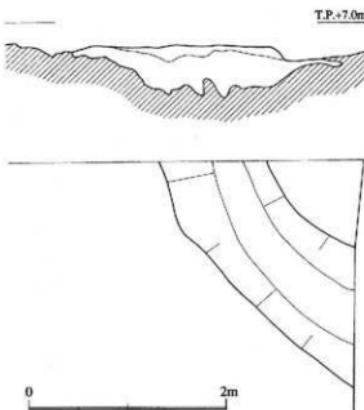
第16層上面が第3遺構面である。顕著な遺構は検出されなかったが、安定した面が存在した(第8図、図版5)。

第4遺構面に相当する第19・第20層上面では、弥生時代後期に比定される3条の自然流路を検出した(第8図)。

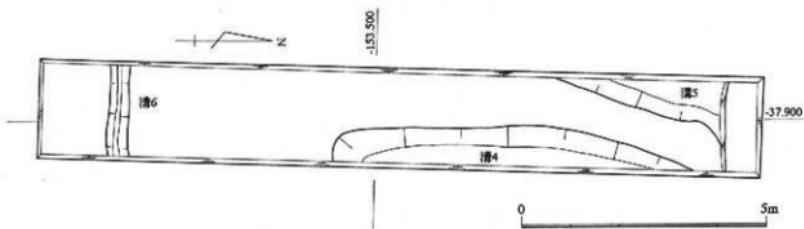
溝4 中央トレーンチ内のA・B-2・3区で検出した南北方向の自然流路である。遺構の西側部分を検出したのみであるが、最大幅は約1.0mを測る。深さは約20cm。平皿状の断面形態をもつ。埋土は上下2層に分けられる。上層は暗灰色細砂～シルト、下層は緑灰色シルト質粘土である。上層から弥生時代後期に属する直口壺の破片が出土した。

溝5 中央トレーンチ内のA-2・B-2区で検出した南北方向の自然流路である。遺構の東側部分を検出したのみであるが、最大幅は約1.5mを測る。深さは約20cm。平皿状の断面形態をもつ。埋土は暗灰色細砂～シルトの单層である。

溝6 中央トレーンチ内のA-4・B-4区で検出した東西方向の自然流路である。遺構の東側部分を検出したのみであるが、幅は約50cm、深さは約7cmを測る。平皿状の断面形態をもつ。埋土は暗灰色細砂と同色のシルトの互層である。河川の氾濫に起因する第18層が当該調査区に到達した際に、浅い流れであった本遺構は埋没したものと考えられる。



第7図 溝2実測図



第8図 溝4・5・6実測図

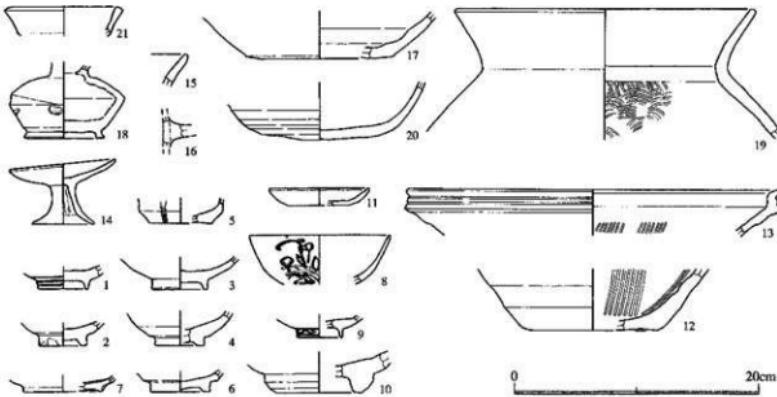
(4) 出土した遺物

当該調査区からはコンテナ2箱分に相当する遺物が出土したが、細片が多く実測可能な遺物は僅かであった(第9図・図版7)。

第2・第3層出土遺物 1は肥前系磁器染付碗の底部である。見込み蛇目釉ハギ、灰白色を呈する。2は肥前系磁器染付碗の底部である。削り出し高台で、高台内は無釉である。3は白磁碗の底部である。削り出し高台で、高台内は無釉である。見込み蛇目釉ハギ、灰白色を呈する。底径約6.4cm。4は白磁碗の底部である。削り出し高台で、高台内は無釉である。釉色はオリーブ色を呈する。体部外面はヘラケズリで高台との境には沈線を施す。5は陶器製の壺底部である。糸切り底で、内面に鉄釉を施す。釉色は黒色を呈す。6は美濃系の陶器碗底部である。内面に鉄釉を施す。釉色は茶褐色～黒色を呈し、一部窯変で銀化する。7は美濃系の陶器皿底部である。釉は灰緑色を呈しガラス化して貰入が著しい。8は肥前系の磁器染付碗の口縁部である。外面に草木文を描く。9是中国製青花碗の底部である。見込みに花文を描く。10は備前焼鉢の底部である。高台は削り出しで、見込み内蛇目釉ハギ、砂が付着する。11は瓦器灯明皿である。口縁部全体に煤が付着する。胎土に金雲母を含み、色調は灰色を呈する。12は備前焼擂鉢である。外面体部の下部および底部をヘラケズリで仕上げる。色調は黄灰色を呈する。擂目は7本/2.6cmを数え、使用によってかなり磨滅する。13は信楽焼擂鉢である。胎土に長石を多量に含み、色調は茶灰色を呈する。擂目は7本/2.0cmを数える。22は唐津系の皿である。見込部に砂目痕がある。23は土師質の土製品である。土鈴もしくはミニチュアの片口鉢と考えられる。

第7層出土遺物 14は土師器高杯である。手づくねで作られる。杯部径8.8cm、裾部径5.0cmを測る。またこの他に磁器染付片や土製品の断片も出土している。

溝2出土遺物 15・16は土師器、17・18・19・20・21は須恵器である。15は土師器甕もしくは羽釜の口縁部である。内外面ともに細かなヨコハケが残る。生駒山西麓産。16は土師器の



第9図 出土遺物実測図

羽釜の鋸部である。鋸下部は焼ける。内面に板状工具によるナデが残る。生駒山西麓産。17は須恵器の壺もしくは瓶の底部である。体部の内外面はロクロナデ、底部はナデで仕上げる。焼成は堅緻で、色調は濃灰色を呈する。18は須恵器壺の底部である。高台はやや外反しふんばる。胴部は珠玉形を呈し、下部に2ヶ所の剥離痕がある。外面全体に自然釉がかかり灰緑色を呈す。焼成は堅緻で、断面の色調は赤灰色を呈する。19は須恵器甕である。口縁端部は丸くおさめる。頸部は釉がたまりガラス化する。20は須恵器壺もしくは瓶の底部である。内外面ともナデで仕上げる。焼成はやや不良で、色調は灰白色を呈す。21は須恵器杯である。口縁端部は外反し平坦面をもつ。焼成は堅緻で、色調は濃い灰色を呈する。

他に第12～14・17層から土器が出土したが、細片のため図化することが困難なため写真のみ掲載した。いずれも甕の体部であり、外面にタタキ痕のみられるもの（図版7-24）とハケメの施されたものがある。

木製品 第12層からは杭が出土している（第10図25）。第17層からほど穴を穿った板材が出土している。建築部材と推定される（第10図26）。



第10図 出土木製品実測図

第4章 まとめ

今回の発掘調査において以下のことが確認できた。

- (1) 当該地点では、平安時代初頭前後まで人間の活動の痕跡を確認することができなかった。出土遺物も原位置を保つものではなく、すべて他から流入したものである。
- (2) 平安時代初頭前後には人間の生活の場となりつつあるが、耕作地として活用されるには至らない。溝などが掘削されており、排水など土地利用の準備が始まったものと推定される。
- (3) その時期以降、現代まで耕作地として活用された。客土を施し、高乾な耕作地とするための努力の跡を土層断面に読み取ることができる。

跡部遺跡は、銅鐸の出土がみられたことなど近隣の久宝寺遺跡、龜井遺跡などとともにこの地域の弥生時代、古墳時代の歴史を復元するために重要な遺跡である。しかし東西約1.4km、南北0.5～1.0kmの推定範囲のすべての地点で濃厚に遺構・遺物が存在するのではない。地点によって粗密がある。基本的に跡部遺跡の中心は、遺跡の東部地域である。

それに対して今回の調査地点が所在する西部地区は遺構密度が薄く、遺物包含層が確認できるだけの地点も多い。とりわけ当該地点付近は、谷状地形に当たり、周囲に比べて標高も低い。長く小規模な湿地が存在したと推定されている。今回の調査成果もこの知見と矛盾しない。平安時代初頭以前には、人間の生活の痕跡は確認できず、自然流路などの遺構が検出されたのみである。そして現地表面下約5mまで上層断面の観察を行ったが、未だ縄文時代に形成された土層に至らなかったと思われる。当該地区一帯に弥生時代から古墳時代にかけて、時折安定した時期もあるが、概ね継続的に砂やシルトが流入し続けていることが確認されたのである。

報告書抄録

ふりがな	あとべいせき
書名	跡部遺跡
副書名	
シリーズ名	大阪府埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	2001-6
編集者名	小林義孝
編集機関	大阪府教育委員会
所在地	〒540-8571 大阪府大阪市中央区大手前2丁目 TEL06-6941-0351（代表）
発行年月日	2002年3月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯 °'."	東緯 °'."	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
あとべいせき 跡部遺跡	やおし 八尾市 あとべきたのまち 跡部北の町	27212 64	34° 37' 00"	135° 35' 10"	2001年9月 ～2002年3月	200	府道改良

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	特記事項
跡部遺跡	集落	古代	溝	地形の形成過程を確認



調査区全景



調査区の周辺（北より）



同上（南より）



調査区の位置（南西より）



同上（北より）



井戸1（西より）



東壁断面



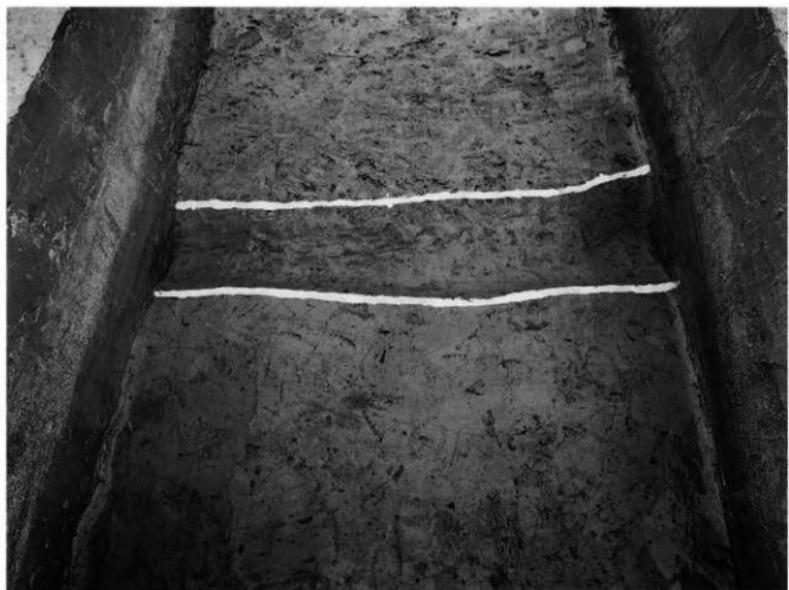
溝2（北西から）



溝2（北から）



第4造構面全景（北より）



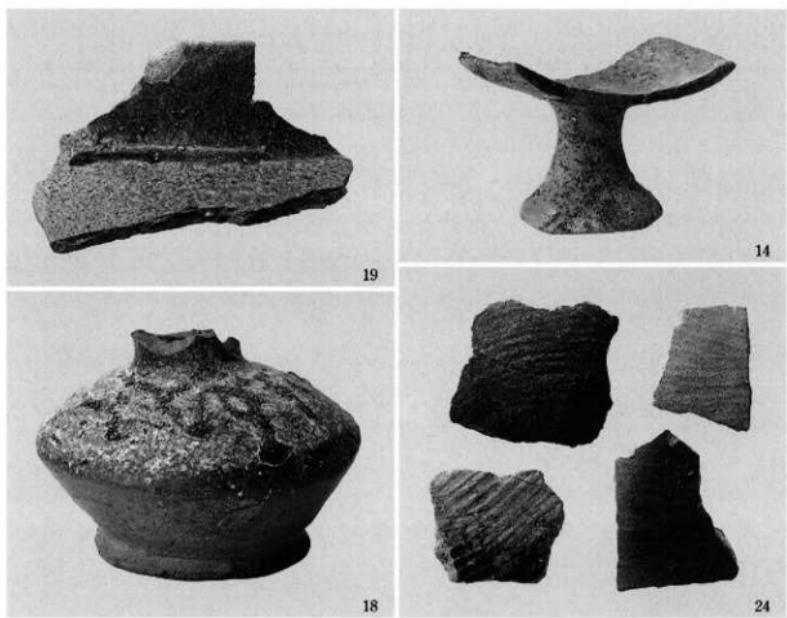
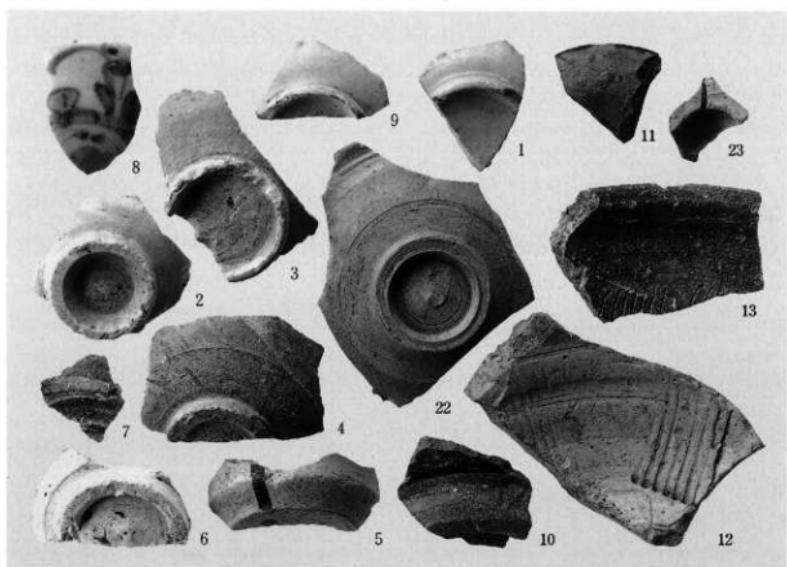
溝6（南より）



東壁断面（第1層～第15層）



同上（第14層～第24層）



大阪府埋蔵文化財調査報告 2001-6

跡部遺跡

2002年3月29日発行

編集・発行 大阪府教育委員会

〒540-8571 大阪市中央区大手前2丁目

TEL 06-6941-0351 (代)

印刷 福清印刷(株)

門真市柳田町3番2号

TEL 06-6902-7201

